
Living thing

絳月葩鶴士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

L i v i n g t h i n g

【Nコード】

N 1 8 5 3 N

【作者名】

絳月葩鶴士

【あらすじ】

気が付いたら、知らない街にいた。

にぎやかな明るい街。だけど、皆、まるで僕の姿が見えていないように、自然と避けて通る。

——僕は存在していないのか……？

途方に暮れかけた時、一人の少女が目の前に現れる。

そして少女は、悲しそうな声で、寂しそうな顔で、こう言った。

「あなたも、自分の事忘れたの？」

少年の失った記憶とその守人、魔術師を巡る、長編ファンタジー。

始

むかしむかし。ある所に、一人の王が支配する平和な国がありました。

城下町は特ににぎやかで、笑顔の溢れる素敵な街でした。

ところが、そんな穏やかな日々も長くは続きませんでした。

ある時、力を付けた農村が王様に戦争を仕掛けました。

その村は特にとりたてて貧しかった訳でも、差別を受けていた訳でもありません。

ただ、“王様になりたい”という野心を持った若者がたった一人いただけ――

それから、世は騒乱の時代になりました。

たくさんの血が溢れ、たくさんの涙が流れ、たくさんの心が、死にました。

どうしてでしょう？

武器の性能が良くなったから？

確かに、その十数年ではるかに武器は強力に、強大になりました。

でも、鍬や鎌しかかった時代でも、たくさんの人が命を落としました。

では、魔法がもたらされたからでしょうか？

いえいえ。魔法はむしろ、人々を守る為に、神からもたらされたとされています。

実際、ここ数年の戦死者数は2桁いるかいないかぐらいまで減りました。

では、どうしてでしょう？

それは――

その文章はそこで途切れていた。血に塗れたノートに書かれた、小説のような文章。

多分、その隣でペンを握りながら倒れていた男のものだろう。
あれ以来。

僕はたまに考える。

あの続きは、何だったんだろう、と。

これは人々がまだ神の存在を信じ、共に歩んでいた時代の話。

始（後書き）

新連載スタートです。

どうぞ、皆様最後まで宜しくお願いいたします。

零..g o s h a w k

気が付いたら、僕は知らない街に居た。とてもにぎやかな街だ。色とりどりの野菜や果物や魚が道中を埋め尽くしている。どうやら市場のようだ。

知らない人達がうじゃうじゃしている。

いつまでも道端に座っているのもなんだから、少し散歩してみる。

そういえば……。何故、僕はこんな街に居るのだろうか？

僕は今まで何をしていたんだ？　僕は本当に存在しているのだろうか。

見慣れない街並み。見慣れない人々。皆僕が見えていないかのように、自然と避けて通る。

「よお、元気か？」

後ろから声を掛けられたかと思ったら

「ああ、お前は？」

どうやら僕に向けて発せられた言葉ではないらしい。

「いらっしゃい」「こんにちは」　僕をすり抜けていくいろんな声。やはり、もう僕は存在していないのか……。

人ごみをそれ脇道へ。大分疲れた。少し休もう。再び、地べたに座る。

見上げればそこには、青い空・白い雲・黄色い鳥。

しばしばーっとする。頬をなでる風が爽やかで気持ちが良い。

遠くを眺める。緑が綺麗だ。――突然、視界が遮られる。その物に焦点を合わせると、それは何と人だった。それも、年端も行かぬ少女だった。金のゆるいウェーヴのかかった長い髪、栗色の瞳、人形のような娘である。

「あなたも、自分の事忘れたの？」

少女は悲しそうな目でそう、呟いた。

「此処は……そういう人のくる場所なのかい？」

「……ええ。たまにいるの。あなた……自分の名前、わかる？」
「そういえば……。」

「……わからない」

「そうだ、それもあったから、僕は“存在していない”と思ったんだ。」

「そう……よほど強い“願い”だったのね。……来て。話をしなげろ」

名も知らぬ少女だが、何故だか信じられる気がしてついてった。
……その少女が、とても愛らしかったからかもしれないのだけだ。

＊

着いた先は小さな、小屋のような家だった。少女はここに、一人で住んでいるらしい。

「座って。少し、吃驚^{びっくり}するような話だから」

本当に、吃驚するような話だった。

「私はリン。ここは失しモノ町^{ロストタウン}。記憶を失った人が来る所。“記憶の墓場”とも呼ばれているわ。ここには魔術師がいて、人の“願い”を叶えてくれる。その噂を聞いた人々が、いろんな国からやってくる。“願い”を叶えてもらった人はその代償として、“記憶”を奪われる。記憶を奪われたら自分の国には戻れないから、皆ここに居座る。そうやって出来たのが、この街。ここまではわかる？」

「何となく」

「あなたはlevel8ね。名前まで、失っているから」

「レベル……？」

「叶えてもらった“願い”が強ければ強いほど、その代償も大きくなるの。それは8段階に分けられ、“level”で表す。だから、8はもっとも、酷い段階」

「……そうなんだ」

本当に何となくだけど、ここまでの話は理解していた。否、理解できる内容ではあった。だがしかし、これが自分の身に起こっている事となれば話は別だ。

「僕は一体、どうしたらいいんだ……？」

思わず、本音が出た。

「……記憶を取り戻す方法は一つ。それは7人の魔術師にあなた（じぶん）を認めさせること。そうすれば、記憶を返してもらえるわ」
「7人？　僕が失くした記憶は8つじゃないのか……？」

「あなたが失くしたのはname（名前）、place（生まれた場所）、person（自分）、memory（思い出）、family（家族）、precious（宝物）、love（恋人）、with（願い）のはず。でも、残念だけど、今回叶えてもらった“願い”については自分で見つけるしかないの。でも大丈夫。記憶を返してもらう時に、各々の魔術師がヒントをくれるわ。それに、次の魔術師の居場所も教えてもらえるし」

「そうなんだ……。でも、肝心の最初の人の場所が分からないんじゃないや……」

「わかるわよ？　そのぐらいなら。私も魔術師のはしくれだから」

「え！？　そうなの？　じゃあ早く教え「でも」

興奮した僕をなだめるかのように、彼女は初めて、僕の言葉の上に台詞を被せていった。

「でも、とても危険なの。魔術師と言っても彼らは人だから、良い人も悪い人もいるわ。運悪く悪い奴に捕まって、ボロボロになって帰ってきた人達を、私は知ってる。……だから、この街の人々は無理に記憶を取り戻そうとはしないわ。……あなたみたいに、名前まで失う人は、稀、だから」

「そう、なんだ」

少しだけ、迷った。何故なら僕はこうして生きていて、このリン、という少女とも会話は成立する。更に、先程の彼女の言い方では、

どうやら僕のように“記憶”を失っている人はこの街には大勢いて、しかも彼らもまた、普通に生活しているというのだ。だったら……。だが、それは所詮一種の気の迷い。僕の答えは最初から決まっていた。

「それでも、僕は行く。自分が自分じゃないまま生きるのなんて、嫌だ」

リンに会うまで、自分はまるで生きていないんじゃないかとも思ってしまった、あの感覚。あんな思いを感じたまま生活するなんて、多分、僕には出来ない。

僕の想いが真剣そのものである事を、彼女は理解してくれたのだろう。僕の顔と先程の言葉を十分に咀嚼するように間をおいてから、彼女は言った。

「そう……。わかった。じゃあ、一つテストをさせて」

「？ 何をすればいいの？」

「私の、兄様に勝って。そうしたら、教えてあげる。兄様、ムハン
兄様」

バサバサバサ……。

羽音とともに現れたのは、目の赤い鷹だった。

え？ 鷹が兄？ どういうこっちゃ。

混乱する僕をよそに、鷹はしゃべり始めた。

「何だ、リン。もしかして……巡人^{めぐりびと}か？」

「うん。……それも、level 8」

「eightだど！？ こんな小僧が……？ 嗚呼、ついに、か……。」

「それで、兄様に案内役を頼みたいの」

「俺に？ ……そういう事か。わかった。じゃあ、小僧！ 表に出な。」

＊

言われたとおり外に出ると、鷹は人になっていた。成程、この人も魔術師ってやつなのか。

ムハン、と呼ばれていた人は、背が高く黒の短髪の、目つきの鋭い青年だった。

「小僧。お前が記憶を取り戻す資格があるか、テストしてやる。ルールは簡単。俺からこの箱を奪ってみろ。範囲は、そうだな……この円の中だ」

そう彼が言うと、地面に円が浮かび上がった。半径1.5mぐらいの円だ。

「時間は無制限だが、この円から少しでも出たら負けだ。わかったか？」

「はい」

確かに、シンプルなルールだ。了承した証として、僕も円の中に入る。

「では、始めましょう。Ready……Go！」

箱は手のひらに収まるほどの小さな物。あれを奪う、というのは難しそうだ。という事は……あの人をこの円から出した方が早そうだな。よし、とりあえず。

「ていつ」

腹を目がけ上段蹴りを放つ。案の定、ひょいっ、とあっさりかわされる。円の縁ギリギリで踏み止まり、次の攻撃を仕掛ける。足元狙いのローキック、ジャブ、ストレート、アッパーカット……etc。だが、彼は相当戦い慣れているらしく、僕の攻撃は見事に全てかわされてしまう。

「ほら、どーした！？ そんなんじゃ俺は倒せねーぞ！」

くっ。次の策を練る為、いったん距離をとる。一応、今までの戦いぶりから彼から手を出さない事はわかっていたので、安心して作戦に集中する。

しかし、ううむ。どーすれば……。ん？ そうか、わかったぞ！

「では……本気で行きましょう。これで最後です！」

「おう、来い！」

僕はぴょんっと跳び上がり、彼の頭上目掛けて足を振り下ろす。それをムハンは横に飛んでかわす。そこですかさず、僕は彼の軸足をひっかけて倒そうとする。

「甘い！」

ひっかかる寸前に片手をついて足を後ろに跳ばすムハン。今だ！足が地を離れ、手が地面についている、という事は、今箱を守るものは何もない！僕はすばやくスライディングしていた体を起こし、箱に飛びついた。

「くそ！」

箱を上上げてガード。目標を見失った僕は、そのままムハンにどーん。痛————。予期せず、僕の始めてにして最後の攻撃は、頭突きとなった。

……うう、頭がくらくらするよお。って、あれ……？

僕はギリギリ円の中にいたが、僕に頭突きをくらったムハンは……「勝負あり。兄様の負けです」

ヤタ————！！！！

喜んでぴょんぴょん跳ねる僕のそばで、ムハンは大の字にのびていた。頭の周りに星やらヒヨコやが見えるのは……気のせいだということにしておこう。

しばらくして、ムハンは起き上がった。

「……うう、痛え。……しかも、負けてるし。チクショー。わーったよ。お前の面倒見てやるよ。……ほらっ、餞別だ」

「あ、ありがとうございます」

ムハンが投げたのは、先程の箱だった。

「これからお前は7人の魔術師に会って、“お前”を認めさせなきゃならん。中には、俺みたいに勝負を挑んでくるような奴もいるかもしれない。」

「そんな時の為に、その箱にはあなたの役に立つ物が入っているわ」「何が欲しいのか、念じてから開けな」

僕の欲しい物、か……。誰かをいたづらに傷つけるような事はしたくないし……。無事に記憶を取り戻すのに、僕に必要な物……。

パコ。ん？ 何だこれ？

箱を開けると、そこには丸い紫色の石がはめ込まれた、美しい装飾品が入っていた。

「お前……その首飾り……」は、元々剣なのよ。あなたが望むような形になる、ね。魔よけにもなりますから、かけておいては？」

「へえー」

確かに、箱から出すと、紐がついていてペンダント、というにふさわしい形をしていた。僕は言われたとおり、それを首にかける。これ……綺麗だなあ。

「……そういや、お前の瞳も、紫だな」

「え？ ……そうなんだ。鏡なんて見てないから、わかんないや」あはは、と思わず自嘲的に笑う。

「何だ。それならそーと早く言えよ。ほれ」

ムハンさんがふわっと手を動かすと、どこからともなく手鏡が出てきた。中を覗き込むと、そこには藍色の髪をした少年が同じように、僕を覗き返していた。

そうか……。これが僕なのか……。

しみじみと感慨にふけりつつ、自分の顔を頭の中にインプットしていると、ゴホン、と咳払いが聞こえて、僕は現実に引き戻された。「そういや、小僧。お前、名が無いんだったな。リン、お前がつけてやれよ」

「私が？ そうね……。じゃあ、“アハト”はどうかしら？」

「アハト、か……。良い響きだね」

「ああ。良いんじゃないか？ 分かり易いし」

？ 何がわかりやすいんだろう？ ……まあ、いいか。兎とに角かく、名前が無いよりずっといいや。

「ありがとう、リン」

「どういたしまして」

「よし。じゃあ、今日からお前はアハトだ。宜しくな^{よろ}」

「はい、ムハンさん」

「じゃ、早速行くか。最初の魔術師の所へ」

こうして、僕の“記憶”を巡る旅が、始まりを告げた。

壱..tortoise

「まだ、ですかねー？」

「うーん……もう少し、かな？」

ガサガサ、バキッ、ゴソゴソ、バキョ、ザクツ、ザワザワザワ……。獣道、と呼べるのかどうかも疑わしい道、いや森の中、を僕達は進んでいた。

“一人目の魔術師はアインス様。ロストタウンの長みたいな人よ。アインス様は煩いのが大の苦手だから山の奥の方に住んでいるわ”
“大丈夫、俺1回行った事あるから”

というリンとムハンさん（ふたり）の言葉を信じて歩く事、かれこれ3時間。僕は騙されているんじゃないかと思い始めた時、突然ザー、ザッパーン。

水の流れ、落ちる音がした。

「お、滝の音だ。アハト、もうすぐだぞ！」

「わーい」

……て、滝？ の近くに家？ って……。わあ。あったよお。

木々が生い茂り、薄暗い森がぽかんと開けた一角に、その家はあった。いや、正確には黒く塗られた重厚な門と藁葺きの屋根があった。何やら小さめの板に“アインス”と縦書きで書いてある。

何か……すごいな……でかいし。ほけーとしている僕をよそに、ムハンさんはその小さな板の下の門の一部をパコッと開けて、ボタンを押した。

ピーンポーン。ガチャ。“どなたかな？” おう！ 声がした！！

「俺だ、ムハンだ。巡り人連れて来たぞー」

ギィィィィ。門が独りでに開いた。

「行くぞ」

「は、はい」

僕達が入ると、門はまた独りでに閉まった。これ、全自動だ。格

好良い……！

門の中はもつとすごかった。竹林に囲まれた家をバックに、何と
いうか“和み”の空間を醸し出している。

「おーい、こっちじゃよー」

声のする方に行ってみると、そこには入口らしきものがあつた。

『お邪魔しまーす』

靴を脱いで中に入る。家の骨組みは木で出来ているらしい。その
所為か、何だか雰囲気柔らかく、良い香りがした。

「こっち、こっち」

ガラガラ、ピシャンッ。

襖を開けると、一つの部屋があつた。床は畳ばり、壁には絵やお
花が飾ってあつて、茶室、というものに似ている。その中に、ポツ
ンとおじいさんが座っていた。開いているんだか閉じているんだか
よく分からない瞳で僕を認めると、おじいさんはおもむろにしゃべ
り始める。

「よく来たね。えーっと、アハト、だったかな？ リン嬢から話は
聞いておるよ」

「は、初めまして」

「ムハン坊も、元気そうで何よりじゃ」

「坊じゃねえし……」

「で、記憶を取り戻しに来たんじゃよな？」

「ツッコミスルー！？」

「あ、はい」

「宜しい。では、儂と勝負をしよう」

「勝負って……？」「つか俺の事は総無視かい……って『！？』
いそいそと床の下から出してきたのは、様々なテーブルゲームだ
った。

「な、どれにする？ チェスか、将棋かりバーシか！？ すぐろく
もチェッカーもあるぞー。カードゲームなら、トランプ、歌留多、
花札に小倉百人一首じゃー！！」

『えー!?!』

どん引いている僕達をよそに、アインスさんは楽しそうだ。目とか、すんげえキラキラしとるし。うわー。何だー何でだー何なんだー。

「で、出た……っ。アインスじいさんのゲーム攻め。じいさんインドラだから、ゲーム好きなんだよ。それに……。こりやお前、勝ち目ないかもな」

「? 何故、ですか? 確かに、僕はゲームなんてやった事ありませんけど……」

というか、全般の記憶が無いから、もしかしたらやった事あるのかもしれないけど……。

「いや、そういう問題じゃないんだよ……」

? どういう事だ? 益々訳の分からない僕を見かねて、んー、と低く唸ってから、ムハンさんは話してくれた。とっても、嫌そうに。

「じいさんはな、こんな所に住んでいるから、一人でずーっとゲームしてるんだよ。いや、最初は孫と一緒に遊びたくて始めたんだけどな? そのうち、孫と会えない寂しさを埋めるために、永遠と一人で遊んでいたら、ものすごーく無駄に上手くなっちゃったんだ。そのお陰で、子どもにはあきれられ、拳句の果てに見捨てられ、奥さんにも逃げられ、さらに上手くなりましたとさ」

めでたしめでたし……じゃない!

「……まじですか。でも勝たないと仕方ないですからね……。受けて立ちましょう」

「おお! そうかそうか。では何をやる? やはりチェスカのう。やった事はあるかね?」

「いえ、ないです。……多分。あ、でも見た事はあるような……」

「そうか。まあ、それは仕方のない事じゃしな……。チェスのは」

「簡単に言うとだ、王・女王^{キング クイーン}・僧正^{ビショップ}・騎士^{ナイト}・城^{ルーク}・歩兵^{ポーン}、16の駒を使って相手の王を取ったら勝ちつつうゲームだ。まあ、俺がちよい

ちよい教えてやるから、とりあえずやってみ」

「それ儂の台詞……」

カコン * m a n y h o u r s l a t e r * カコン

「くそーっ！ 口惜しい悔しいくやしー！ー！いつ！ 何故じゃ！
？ 何故勝てんのじゃー！？」

「そう、言われましても……」

結局、アインスさんの家にある全てのゲームをやらされた結果、
何故か全て僕が勝ってしまった。

「お前、すげえな……」

「くうう。こやつ、もしや相当の手練れではあるまいな……確率計
算が出来るなんて話、聞いてはおらんぞ……」

「いや、それにしたって、毎回ブラックジャックにやらねーし、
フルハウスは出ないし、五光もくつつきも手四も、ましてや、地和
も出ねえよ」

「ううっ。確かに。儂だってゴーインググラミーなんて、バックギヤ
モン勝ちなんて、7コマ跳びだっただ事なかったのに……。それ
に、やはり目を見張るべきはチェスや将棋かのう。まさか、スパイ
に將軍もつていかれるとは……流石、というべきなんじゃろうな。
でも、口惜しいものは悔しい。も、もう一回！ もう一回じゃ！」

「ヲイ、じいさん。いい加減諦めろよ。もう夜だぞ？ 流石に帰ら
んとリンが」

「む、そうか。もうこんな時間か。……仕方ない。アハト、こちら
へ」

「あ、はい」

アインスさんの前に僕が座ると、彼は杖を取り出した。

「では、行くぞよ」

ごくりっ。……ちよつと緊張する。あれ？ でも、そういえばど
うやって“記憶”は返されるのだろう？

すると、彼は杖を構え、さつきとは打って変わった風格溢れる気高い声で、こう唱えた。

巡り巡ってお前はここに 回り回って私はここに
お前と私を繋ぐ縁^{えにし} たどればお主に行きつこう
お前は世界の一片^{ひとかけら} 片は集まりお前を成す お主の一部、今帰らん！

＊

“×××！” “×××！！”

誰かが僕を呼んでいる。親しみにあふれた、優しい声。

ロストタウンに似た、にぎやかな街。城もある。城下町のようだ。

大人から子どもまで皆笑っていて、平和そうな、そんな街。

明るくて、温かい、僕の故郷。

“お前は優しい子じゃ。その優しさ故に、こうなってしまったんじゃないよ”

薄れゆく意識の中で、そんな言葉を聞いた気がした。

＊

パタン。

……ふう。どうやら、無事に記憶戻ったらしいな。あー。疲れた。

「んじゃ、俺こいつ連れて帰るわ。次の奴は？」

「アル・リアン姉妹じゃよ。ほれ、あの「ああ、あの最年少魔術師の？」

「うむ。そうじゃ」

「へえ。そっか……」

まあ、まだ、まし、かなあ？

「……この少年」

「？」

「良い子じゃったのお……」

「ああ。なんせ、あいつが認めた奴、だからな」

「それも、そうじゃな。……また来るように、伝えておいてくれ」

「分かった。それじゃあ「ムハン、お前もじゃ」

「？」

「たまには、顔出せ」

「……またな」

ガラガラガラ。

ふう。んじゃま、久しぶりに使いますか。魔法。

「気をつけてな」

「はいはい」

そんな言葉を後にして、俺達はとりあえず、家に戻った。

＊

気が付いたら、僕はリンの家のベッドの上で横になっていた。

寝ている間、空を飛んでいる夢を見た。すっごく、気持ち良かった。

P L A C E c o m e b a c k . T o t a l . . 1

式..k i t t e n

ガチャ。

「いらっしやーい♪ さあ、どうぞどうぞ。入って入ってー」
ガチャ。

「さあさあどーぞ。座って下さいい。あ、今お茶入れますねー」
コポポポポポポ

「はい、どーぞ。どんどん飲んで下さいねー。お菓子もどーぞー」
ドサッ、ドサッ。

「お菓子はリアンが作ったんですよ。あ、私リアンですよー。双子の妹の方ですよー。えーっと、あなたは？」

「アハトで「アハトねー。わかったー。ムハン兄は久しぶりだねー」
「ああ「元気そうで良かったー。」

「あ、あの、お姉さんは「アルですか？ アルは今木の実を取りに行ってますー。だから、リアンとお話しして待ってましょー♪」
『……はあ』

クック、クルック

「でねー、アルったらそのまんま木から落っこっちゃったんですよー」

「そう、なんですか「でねー「あ、あのお！」

「？ 何ですか？」

「あの、僕達はいつまでこうしていたら良いんですか？」

「アルはまだ帰ってこないのか？」

「・・・」

すると、このおしゃべりな小さな魔女さんは黙ってしまった。この家に招きいれられてから1時間程。その間、ずーっとしゃべり続けていた少女が、だ。これで怪しいと思わない方がおかしいだろう。

大体、ここに入ってから何か嫌な予感はしていたのだ。何故なら――

「もう」

「？」

僕が思考をまとめようとした時、おもむろに、そして意味ありげに、リアンが口を開く。その声は、今までの女の子の子供の可愛らしいしゃべり方ではなく、丁寧な大人の話し方のように、僕には聞こえた。それがあまりにも不気味に響いたからであろうか。

「もう」、何だよ？」

ムハンさんは、先を促した。すると、にたあ、と口に微笑を浮かべて、リアンは言った。

「もう、良い頃ですかね？ “ムハン兄”、“アハトさん”」

『え……！？』

ガッシャーン。

……？ 何だ？ 急に、体が重く……動かない……。まるで、椅子に鎖で縛りつけられているみたいだ……。

「リアン、てめえ……。何入れやがった……？」

成程……。ムハンさんはこの紅茶、あるいはお菓子に、何か――毒でも入れた、と考えたようだ。まあ、確かに。この部屋を見たら、そう思うよなあ……。

怪しげな本やら、原色の粉の入った瓶やら、ガチガチいつてる草とか、見た目年齢小学生しかも低学年、の女子二人が住んでいるにしては、おかしい物が多すぎる。でも……

「別に。お茶やお菓子には何も入ってないですよ？ これらはあくまで、兄達とのお話を盛り上げる為に、用意しただけですから。それに、私達は魔法薬学の単位は、落としてますから。私達の魔法がそういうものではない、ということは、ムハン兄が一番よく知っていらつしやるのではありませんか？」

「……ああ。だが、それじゃないなら、何で……」

「それは

バッテリーッ

「こら、リアン！ 何やってんの！？」

「アル……」

派手にドアを蹴破って入って来たのは、リアンと同じぐらいの、年端もいかぬ少女だった。こげ茶の髪にきつめの目、短パンにだぼだぼのローブを着た少女。栗色のふんわりと長い髪に、これまたふんわりとしたワンピースを着ているリアンとは、性格も外見も正反対っぽいのが、どうやらあれがリアンの姉、アルらしい。

「もう！ 何先に始めてんのよ！」「だってえ」「大体あんたはいつもそうやって

ギャーギャー

……。姉妹で争っている間に、ここに至るまでの経緯を説明しようと思う。嗚呼、やっと自由時間。

僕達はアインスさんから、次の魔術師を教えてもらった。それが、このアル・リアン姉妹である。彼女達の家は森の奥の中程にある、こじんまりとした家だった。小さめの窓があって、煙突がある、よく小さい子どもが描くような、そんな家。

コンコン、とノックする。

「いらっしやーい♪」

出迎えてくれたのは、これまた絵に描いたような可愛らしい少女。怪しむ間もなく家に押し込まれ――

ギャーギャー

……。今に至る、という訳だ。

「もう、これだからあんたは「で、でもでも、まだカンジンな所はやってないよ！？」

「そう……。まあ、それなら良いけど。全く。こんな面白い事、めったにないんだから、独り占めはなしだよ？」

「はーい♪」

結局、当初の僕の嫌な予感通り、悪魔が二人になっただけだった。

コホン

「さて。アハトさん、でしたっけ？　いらっしやい。私はアル。双子の姉の方です。さて、あたし達からの課題は、この家から無事に抜け出してもらいう事です。」

『へ？』

「勿論、鍵は全て閉め、煙突もふさがせてもらいますから♪」
『え？』

「タイムリミットは、兄達が死ぬまでー。あ、死んじやったら出られないからだよー」

『ちょ、ま』

「じゃあ『よいいどんっ！』がんばってくださいねー」
ボタンッ、ガシャン、ガチャッ。

……まじっすかー。嘘だろー。えげつねえよー。しかも、暖炉火ついたまんまだよー。このままじゃ一酸化炭素中毒だよー。

「ムハンさん、どうしよう……？」

「どうするもなにも、まずはこの拘束を解かんと……」

うーむ。魔術師であるところのムハンさんにも解けないとなると、よほど強力な術なのであろう。そんなものをどうやって……。けほっ、けほっ。うう、酸素が……。

「どうしたら……」

その時、ピカ、ピカ。何かが僕の胸元で光った。そうか！

「ムハンさん、この首飾り、どうやったら剣に戻りますか？！」

「え……？　嗚呼、そういう事か！　冴えてるぞ、アハト！」

ズズズズズ

「ふう。やっぱり、温かい紅茶に限るわ。これでこそ午後のティータイムだよ」

「そうだねー。あ、そういえば、あの2人、どうなったかなあ？」

「いくらなんでも、まだかかるんじゃない？」

「そうだよー……んっ!？」

「どした!？」

「……椅子の鎖が、破られた」

ザシュッ

「その剣はお前が願った通りになるからな。言霊の鎖でも切れるって訳だ。サンキュー、アハト。助かったぜ」

「いえいえ」

首飾りを元の剣に戻すのは、案外簡単だった。ただ、祈れば良いだけだったのだから。……本当に、僕の思った通りになるんだな。

「さて、次はどうやってこの家から出るか、だな」

「はい、そうですね……。そういえば、さっき言っていた“コトダマ”ってなんですか？」

「あ、ああ。まあ、要するに“言葉の力”って奴だ。確か、アル・リアン姉妹の得意なのはそういう魔法だからな。おそらく、さっきの鎖も、この家に張られている結果もそういう類のものだろう。で、どうするよ、アハト」

「……」

「アハト？」

「……僕に、考えがあります」

ズズズズズ

「そう。鎖が、ね。……なかなかやるわね、あの方」

「でも、私達の魔法は解けないよね？ だってあれは、私達オリジナルの、最高傑作の魔法だもの。大丈夫、だよ？ ね？ アル」
「うん……」

ペカー

「考え、って？」

「……おかしい、とは思いませんか？」

「何がだ？」

ムハンさんは気付いていないのか……。そりゃそうか。自分も魔術師なんでもんな。だけど……一般人の、何も知らない僕からすれば、この部屋はおかしい事だらけだ。この部屋に入ってからずっと思っていたその疑問を、僕はやっと口にする事が出来た。

「こんな、リボンやレースやぬいぐるみやらで彩られたファンシーな空間に、隠しめせず魔術関係の本や、髑髏や瓶が置いてある事です」

「……？ 何が言いたい？」

「この部屋、この空間自体が、彼女達によって創られたもの、なのでは？」

パキン

「あーあ。解かれちゃった」

「ふう。死ぬかと思った」

思った通り、あの家は彼女達の魔法で造られたものだった。そうと分かれば、関係しそうな物を片っ端から斬ってしまえば良い話だ。……大分乱暴だけど。

でも、後から聞いたら“魔術師以外の者があの空間から抜け出すためには、その方法しかなかった”との事だったので、ついでに言えど“でも本当はもう少し法則性とかを考えて順番通りにやらないと、絶対に壊れないんだけどね！”という事だそうなので、まあ良かったのだろう。（ちなみにその後、“そんな出鱈目な剣、持っているなんて聞いてない！”とちよっとキレられたのは、秘密）

「じゃあ、記憶お返ししますねー」

すると、どこからともなくピアノが現れて、聞いた事のないリズムカルな音が鳴り始めた。そして双子は歌い始める。その外見に見合った、可愛らしい声で。知らない、でもどこか懐かしい音楽を奏で始める。

♪世界の始まりは1つ 線を引いて2つ

誰かさんが線を引く 自由気ままに線を引く

細かく分かれたこの世界 現在の引き手は誰だ♪

＊

お城、ベッド、机、鳥籠、本棚。

窓の外には花畑、色とりどりの屋根。

食堂にはおいしそうな料理。僕の好きなオムライスもある。

教室の黒板に並んでいるのは、難しそうな数式や文字。そこには机に向かって必死で何かを書いている僕と、それを指導する先生。どうやら勉強しているみたいだ。

次は剣の稽古。格技の練習もしている。

いろんな場面が、走馬灯のように流れていく。

けれど、そこに共通している事は全部

僕が“笑顔”だ

という事だった――

＊

「はぁ、やっと終わった。……つかよお、何も俺まで閉じ込める事ないだろ？」

「それにしても……まさか私達の最高傑作を見破るなんて……」

「ツイ、無視か？」

「流石アハト様、リン様の認めた人ですねー」

「・・・」

M
E
M
O
R
Y

c
o
m
e

b
a
c
k.

T
o
t
a
l

..

2

参..moth

“貴方の願いは叶う事は叶いました”

“でもそれが、貴方の望んだ形かどうかはわからないけれど”

これが、アル・リアン姉妹がくれた“ヒント”だった。僕は、この言葉が彼女達の元から帰って来てからずっと、頭の中から離れずにいる。

確かに、気になってはいたのだ。僕が頼んだ“願い”がどんなモノであったのかはまだ分からないけれど、今こんなに大変な思いをしているのである。叶っていなければ困る、というか報われないなあ、とは思っていたのだけれど……。それがまさかこんな形で……。それに……

「……ハト。おい、アーハートー。聞いてんのかあ？」

「あ、は、はい！ すみません」

いけない、ぼーっとしてた。今はそれどころじゃないのに……。はあ。情けないなあ……。

「どうしたんだよ、ぼーっとして。アル・リアンのところから帰って来てから、ずっとそんなんだな」

「すみません……」

「？ 何だ？ 何か気になる事でもあるのか？」

「いえ、そんなんじゃないと思うんですけど……。ただ……」

「何だよ。はつきりしねえなあ。気になるから言ってみろよ、ほれ」
……言葉遣いこそ乱暴だけど、僕の事を気遣ってくれているんだよなあ……。優しいな、ムハンさん。その優しさに甘えさせてもらって、僕は心の中に渦巻く不安を口にした。

「何か……気持ち悪くって」

「気持ち悪い？」

「少しずつ記憶は戻ってきているけど、その中に僕はいないから。名前が、戻らないから。だからこれが本当に自分のモノなのかどう

か、判らなくって。……全てが、偽物のように思えて……」

「……そっか。まあ、元気出せよ」

「はい」

「それに、名前ならあるじゃねーか」

「？」

「今のお前は“アハト”だ。本当の名前が思い出せるまで、お前はアハトだ。な？」

「……はいっ」

ぽむ、と頭の上に乗せられた手は、とても温かった。

「ほれ、着いたぞ。次の魔術師……トロワの家だ」

ああ、もう着いたのか……。って。

「え？ ……でっかあ——っ！」

街外れの荒野にポツンと佇む一軒の洋館。それがトロワの住まう屋敷、のようである。それは、僕が今まで気が付かなかったのがおかしいぐらい巨大で、立派なものだった。多分、普通にお城クラス、否それ以上の大きさと言っても過言ではない気がする。また、これだけ大きいと、汚れとか蔦とかが目立ちそうなものだが、そんな物は一切なく、代わりに大勢の青少年達が、汗水流して館の清掃を行っていた。そりゃあ綺麗になるはずである。しかし……。この人達、そして、次の魔術師“トロワ”という人は、一体何者なんだろう？

「と、とりあえず中に入ってみましようか？」

「・・・」

「？ ムハン、さん？」

さっきまで僕の前を歩いていたはずのムハンさんは、いつの間にか僕の後ろに立っていた。心なしか顔色が悪い気がする。どうしたのだろう？ 体調でも悪くなったのだろうか。すると、いつもでは考えられないほど弱々しく震えた声で、ムハンさんは言った。……しかも、裏返った声で。

「あ、アハト。悪いが、ここには一人で行ってきてくれないか？」

「え!?! 何で?!」

「こ、今回は案内だけって事で、な?」

「えーっ。だからどうして「こらあ!」

『!?!』

声のした方へ振り返ると、真っ赤なドレスを着た美しい女の人が、猛然と歩いて、こちらに近づいてくるところだった。

「何さぼってんだそこおっ!」

『は、はい!』

背筋、ぴしっ。

「? 何だ、見ない顔だな。新入りか。なら仕方ない、か。ほれ、とりあえずコレ持って。まずは庭掃除からな」

「え? あ、あの」

「早くしな」

そう言うのと、再び猛然と歩き去っていった。持たされたのは竹箒。

「と、とりあえずやりましょ……!?!」

サツサツ、ザーザー。

ムハンさんはもう既に掃除を始めていた。よっぽどあの女の人が恐かったからなのか、それとも、前にあの人と何かあったのだろうか……。しかし、綺麗な人だったなあ。言葉と目つきは、大分きつかったけど。僕達に声を掛けてからも、あちこち動き回っている。あれがトロワさん、なんだろうか。そんな事を考えていたら、いつの間にか結構な量のごみが溜まっていた。すると、遠くから音が近づいてきた。ツカツカツカツカ

「ほう。あんた筋が良いねえ。小さいけど、なかなか器用そーだ。ついてきな」

ガシッ。あ——れ

。

＊

館の中は更にきらびやかで更に人がいた。

大広間に吊るされたシャンデリア とそれを磨く人達
豪華な額に入った美しい絵 とその埃をとる人

額縁のずれをmm単位で直す人々

窓枠にはめ込まれた色とりどりのステンドグラス とそれを家の内外で磨く人々

そして僕は、アンティークの家具がずらりと並ぶ部屋を彩る花達の手入れを任された。そこには、沢山の花瓶と、大量の花、華、葩
.....

「あんたの趣味で飾って良いから。じゃ、あと宜しくっ！」
ボタンッ。ツカツカツカ.....

仕方なく、僕は作業に取り掛かる事にした。

彼女の猫のような目、ウェーヴのかかった短めの明るい茶の髪、深紅のドレス姿なんかを、思い出しながら.....

＊

「くそ。俺が何で.....」

そう思いつつも、手が勝手に動いてしまう。ブチッ、パチン、パチン。

「こんなの、兄貴が結婚した時以来だ.....」

ここの主、トロワは所謂お嬢様で、“贅沢”というものが生活の一部になっているような人である。この花園もその一つ。しかし、先代が一代で倒産寸前の会社を一流企業の仲間入りをしたような人だったので、“働かざる者食うべからず”の精神が身についていて、やったら働く。ついでに、自給自足の精神も併せ持つ。お陰で、この館の敷地内には、畑、果樹園、更には牧場まであるのだ。俺も良くここで働きながら、あのベンチに座っていちやつく二人を眺めながら.....

「はあああああ——」

溜息をついていた、な。本当、何で俺、彼女いないんだろ。

「はああああああああ」

カツカツカツ

「久しぶりだね、ムハン」

ひっ！ 出たっ！

ガシッ。あ——れ——。

＊

「ようし、でけたー」

20本ぐらいあった花瓶は、全て花で埋め尽くされた。ふー。あれ？ でもなんか僕、大事な事を忘れているような……。

ちょうどその時、カツカツカツ、誰かが部屋に入る気配がした。

「あ、終わりましたよー。どうですかね？」

「・・・」

え？ 何故無言？

「アハト、だったか。ちょっと来な」

「は、はい」

……あれ？ 何で僕の名前知ってるんだ……？

テコテコテコテコ

「あ、ムハンさん。どこ行ってたんですかー？」

「ちょっと……な」

？ 歯切れが悪い。てか、ムハンさんなんか小さくないか！？

借りてきたにゃんこみたいだ……。すると、彼女に会った時から感じていた疑問を、彼女自身が明かしてくれた。

「全く。我が義弟も人が悪い。「義弟！？」「いや、そこ食いつくなし」」

「巡り人連れてきたなら、そうとすぐ言えば良からうに」

「……すまん」

「あゝ？ 声が小さい！」

「どうもすみませんでした！！」

あーんぞお辞儀（直角）。それはもう、美しいまでの礼だった。思わず笑う。ぷぷ。

「そこ笑うなあ！ ごほんっ。それより、記憶、返してやれよ」

「えー」

「おい！」

「冗談だよ。よく働いてくれたしな。まあ、良いだろう」

フワッ。肩に巻いていたストールを宙へ投げると、それは床に円を描き、線となって消え、代わりに何やら紋様が浮かび上がった。そして、カツンッ、とヒールを鳴らし、迫力のある美しい声で語り始めた。

真っ新たな画版に どの色を乗せようか

赤橙黄緑青藍紫 世界に色は沢山あるけれど

自分の色を見つけられる奴は 世界にどれほどいるのだろう

＊

広い部屋。テーブルの上には、机いっぱい料理。その周りには笑顔、笑顔、笑顔……。

とても、とても優しくそうな人たち。温かくて、和らかい。

……嗚呼、これが僕の家族なんだ……

“お前の願いは正しい。だがそれ故に、難しいんだ。”

＊

「しかし、久しぶりだな、ムハン。あの時以来、か？」

「ああ、そうだな」

「何年になる？」

「別居してから、っていうなら、ちょうど10年だ」

「そうか、もうそんなに経つのか……」

「なあ、義姉さん。そろそろ兄貴んとこに帰ってやれよ」

「気が向いたら、な」

「はぁ。そういうと思ったよ。でもまぁ、兄貴も義姉さんのそーいうトコロ、解ってて結婚したんだろうし。それで良いんじゃない？」

「そうか？ ……そう言ってくれと、嬉しいよ。どれ、送ってやろう。次は我らが大将だ。……早く、この子を楽しませてやれ」

F A M I L Y c o m e b a c k . T o t a l . . 3

肆.. viper

「いーやーじゃっ！ 儂はこの家から出とうない！」

「じゃあ、スー婆と一緒に暮らしたくないんだな？」

「それは……。うう。す、スーがこちらに来れば良いじゃろ！？」

「ですから、先程も説明したように、スー様はスー様で、それはお嫌なようでして……」

「儂はこの家で余生を過ごす（たのしむ）と決めたんじゃ！」

『……はあー』

「戻るぞ、アハト」

「はい」

これで、双方を往復する事5回目か……。全く、スー様もアインス様も、頑固なんだから。ムハンさんにぶらさがり（のせてもらい）ながら、もう通い慣れたスー様の家へ急ぐ。にしても、山越えはしんどい。

何故こんな事になったのか。それは数時間前に遡る。

＊

次の魔術師、スー様の家は、湖のほとりにあるペンション風のログハウスだった。しかし、魔術師さん達っているんな家に住んでるよなあ。こういうのも魔法で創れたりするのかな？

毎度おなじみ、“魔術師のお宅拝見コーナー”を知ってか知らずか、それがちょうど終わるタイミングで、ムハンさんは話し掛けてきた。

「良いか？ スー婆はこの界限で数少ない、一級魔術師だ。しかも、その中でもボス的存在として君臨し、逆らったらココじゃ生きちゃいけないとさえ言われる……。くれぐれも、失礼のないようにな」

「は、はい」

ムハンさんのこれまでにない真剣な表情に圧倒され、思わずうなずく。でも、どんな人なんだろう？ スー様って……。恐怖に身を震わせながら臨んだ、対スー様戦。

「行くぞ」

ガチャッ。カランカラン。

ごくっ。息をのむ。

「すんませーん。お邪魔しまーす。スー婆様」

ザシュ。ビィィィン。

『……へ？』

何者からか放たれた物は、金属製の細い棒だった。刺さった先は、ムハンさんの足元。つま先から3cm離れた地点。え？ 何で？

矢羽とかついていないのに、どーしてこんなに正確に打ち込まれてんの？ 打った人が分からないくらいぐらいには、奥からの攻撃だったよ？ って、問題そこじゃない！ 何でお家に入った瞬間、こんなもん射ち込まれなきゃいけないのか、だ！ と心の中だけでツコミつつ、こりゃ一歩も動けないな、と体を強張らせていたら

「誰だ？」

女の人の声がした。

「お、俺です。ムハンです」

「何？」

コツコツコツ

「おお、ムハン坊。久しぶりじゃのう」

「スー婆もお元気そうでなによりです。それより……コレ、どうにかしてくれませんか？」

「おお、すまんすまん。つい、な」

ズゴッ

「つい、って……」

「お前が先に名乗らんのが悪い」

「まだゴロツキ共の相手してるんすか？」

「はっはっは。まあ、青少年更生の一環じゃよ。それに、お前だっ

てそのゴロツキだったじゃろーに」

「それを言わないで下さいよ」

『はっはっは』

楽しそうに笑いあう二人。そうか、この人がスー様なのか……。しかし話が見えない。当然、呆然とする僕。

「あ、わりい。スー婆、紹介します。こちら「level8」じゃろ？ 話は聞いておる」

「アハト、と言います」

「そうか。まあ、立ち話もなんじゃ。あがりなさい」

＊

スー様は、僕の想像とは全くの別人だった。

まず、家具や内装がカントリー調で可愛い。ツールペイントとか、人形などの細かい雑貨も置かれている。あれきつと手作りだ……。つか、ログハウスの時点で、ボスっぽさがあんまりなかったけどね。

そして、裏番的な人らしいのでそれ相応の強面な感じの人かと思いきや、どっからどー見ても上品なマダムだ。むしろ、思ったより若いぐらい。

まあ、そこそこ風格はあるし、なんかすごい人っぽい感じのオーラは出てるけど……。世の中って、不思議だ。

「さて、ようこそ。我が屋敷へ。私はスー。では早速、課題の発表をしようか。私からお前たちへの課題は……」

『課題は？』

先を促す僕達。でも、何だかしやべりづらそうにしているスー様。やがて、覚悟を決めたように、はあ、と息を一つはいて、仰々に、というには似つかわしくないか細い声で、言った。

「……アインスを、ここに連れてくる事、じゃ」

『え？』

「何故、ですか？」

「ああ、そうか。アハトは知らなかったのか。この方こそ、じいさんの別居中の奥様だ」

「へえ……えええーっ！」

嘘ーん。マジっすか！？　だ、だってアインス様は80オーバーのご老人。片やスー様は60、いや50そこそこだろう。

世の中って、わからん。

「……私はもう、怒ってはおらぬ。それ故、また二人でここで生活したいのだ」

「スー様……」

何というか、そう

「可愛いところもあるんですね」

そう、それ。何か、毎日のように一緒にいるからかな？　ムハンさんと大分意思の疎通が出来るようになった気がする。ビィィィン。そんな事を考えていたら、第二撃が発射された。

「う、五月蠅いぞ、小童^{こわっぱ}。良いからとっとと行ってまいれ！」

「いや、スー婆。お願いですから、照れ隠しで武器^{えもの}投げないで下さいよお……」

今回の位置は頭上1cm。流石に近いと精度が上がる。というか、これで分かった事が一つ。あの金属棒は弓矢のように射られたものではなく、スー様の腕力でやり投げのように投げられたものだという事だった。いや、棒自体は長さ30cm程度の普通の大きさだが、それをあんな精度で投げられるなんて……。いやはや、恐ろしや。

と、いう訳で。早速、僕達はアインス様の家に訪れたんだけど……カクカクシカジカ　コレコレウマウマ

「そーいう訳なんです。一緒に来てもらえますよね？」

「……いやじゃ」

『へ？』

スー様の条件は、アインス様がスー様の家に来る事。

二人が別れる原因となったゲーム達と一緒にいたくない、という

のが、スー様の言い分である。ところが、それに待ったを掛けるアインス様。一緒に暮らしたいのはやまやまなのだが、愛するゲーム達と離れる事は出来ないという。

で、僕達は幾度も、双方を行ったり来たりしているという訳なのだ。

ヒューツ ＊ バサバサバサ

「そ、そんなに言うなら、スーをここに連れてこい！」

「それはダメなんですよ」

「一応、こいつの記憶を取り戻すための課題なんでね」

「という訳で」

『一緒に来てもらいましょう！』

「スー様直伝！ E m o h !」
シュツ

「うむ。よくやった」

「ここは……？」

「スー様のお家です」

「え……？ ……え——！？」

うん。まあ、アインスさんが驚くのも無理はない。僕も最初は驚いた。だって、こんなワープみたいな事も出来るなんて、知らなかったもの。まあ、スー様曰く、

“ワープ、という訳ではないのだがな。2つの空間は何かしらの物質を媒介にして常に繋がっているから、それを基にして道を繋ぐ。

あとは、隣の隣は隣り合う、の原理で強引に道を短縮すれば、瞬間的に移動が出来る。まあ、もっとも、この理屈は少々強引すぎて上手くイメージがつかめないらしく、使えるのは私と、一番弟子のムハンぐらいだがな”

だそうだ。僕にはさっぱり解らなかったが。

「しかし、本当に連れてこられるとは思っていなかったぞ。よくや

すると、僕よりはるかに気の短いムハンさんが

「あゝ。もう」

と文句をもらした。

「そんなんなら、別居のままでいいじゃないっすか」

あ！ 見た事ある！ たきつけ屋、とか言う人だ！

「そ、それは……「嫌じゃ！」

「アインス……」

うっそーん。こんな安いたきつけに乗っちゃった！？

「儂はスーと一緒にいたい」

「それなら「じゃがゲームとは離れとおない」

「そんな……。だって、アレは……」

つか、どんだけゲームに嫌な思い出が……？ とは、流石に言えなかったけれど、代わりにずっと思っていた事を口に出してみた。

「だったら、スー様と一緒にやればいいじゃないですか」

『え？』

目を丸くする二人。いや、そんなに驚かれても……

「大体、ゲームは一人でやるもんじゃないっすよ」

うんうん。

「そうか。だが……私は生まれてこの方ゲームなど「儂が教えてやるよ」

「アインス……」

「なーに。そう難しいものではないさ。ゲームは元々、楽しむものじゃしな」

「そう、だな」

「さあて、そうと決まれば善は急げ、じゃ。何からやる？」

「そうだなあ……」

ははは、ふふふ。楽しそうな笑い声、はずむような話し声。ぱあっと部屋に花が咲いたような雰囲気。って、中学生の次は新婚さんかい！

「まあ、これにて一件落着、だな」

「ですね」

ふう。やっと終わったあ。へなへなと床に座り込む。あゝ。これで帰れる。

「む、そういえば、記憶を返さなければならぬな。アハト、此方へ」

「はい」

って、忘れてたの!? そんな僕の動揺はお構いなしに、スー様は銀色の細い棒を取り出した。嗚呼、散々投げてたあの棒、スー様の杖だったんだ……。

「m o o r」

シュッ。

移動先は、何やら床に模様が描かれた部屋。

「? ここは……?」

「ここは特別な部屋でな。強力な魔法、例えば、道を繋ぐといった作業をする時はここを使う。下の方陣は魔力を高める為のものなのさ。そして、お前の記憶も、ここにある。真中に円が描いてあるだろう? その中に入れ」

「はい」

「では」

物にはあるべき所がある 物体と場所とは一対

どちらが欠けても成立しない どちらが欠けても意味はなさない

私の物は私の元へ お前の物はお前の元へ あるべき所へ戻りなさい

＊

前にも見た。人々の笑顔と、明るくにぎやかな街

もしかして……僕はこの人達の為に何かしたかったのだろうか?

この人達を守る為に願い事をしたのだろうか?

“ そうだよ。お前の願いは、己自身の為のものでは決して、ない”

P
R
E
C
I
O
U
S

c
o
m
e

b
a
c
k.
T
o
t
a
l
..
4

伍..muridae

今回の魔術師の家は、久々の街中だった。そういえば、この街を歩くのは久しぶりだな。最近はずっと山奥だったからな……。リンに遭った時以来かもしれない。相変わらずにぎやかで笑顔の絶えない所だなあ……。あ、あ……。れ……？

「次の魔術師は俺の兄貴の研究仲間だな。まあ、ちょっとした知り合いなんだ。ちょっと変わってるけど良い奴……。どうかしたのか、アハト？ 顔が怖いぞ？」

「い、いえ。何でも、ありませんよ」

急いで笑顔を取り繕う。が、しかし……。まさか、な。

「そうか？ それなら良いが……。ほれ、着いたぞ。ここだ」

5人目の魔術師、サンクとその弟リウの家は、全体的に白くて丸くて可愛らしいものだった。何故だか、冬の豪雪地帯が思い浮かぶ。サンクという人は本当にムハンさんと仲が良いらしく、“勝手知ったる他人の家”という感じで、ノックもせずに数回ノブをガチャガチャと回して、家の中に入っていく。え？ 鍵、ダイヤル式なの？ とのっけから大いに驚かされたものの、中に入ると、更に驚いた。このこじんまりとした部屋に似つかわしくないほどの本が、所狭しと並んでいる。その中から、ぴよこんと丸眼鏡をかけた少年が顔を出した。

「よお、リウ。サンクいるかあ？」

「あ、ムハンさん。こんにちは」

ひょいっと本の山から出てきた少年は、意外と落ち着いた声をしていた。もしかしたら、僕より年上かもしれない……。と、軽くシヨックを受けていたら、リウは僕に気がついたらしく

「えーと、お連れの方は？」

彼の方から尋ねてくれた。そして続けて

「嗚呼、例の……」

と、うんうん、とうなづきながら言う。自分の中で我点がいったようだ。

周囲に気を回せるだけではなく、よく気がつくリウ少年。何とうか、育ちの良さ、というか頭の回転の良さを感じるなあ、としみじみ思った。

「はい、アハト、と言います」

いつも通り名乗ってから、この名前も大分馴染んできたな、と少し嬉しくなった。

「いらっしやい、アハトさん」

にこやかに返してくれるリウ。何か癒される……。嗚呼、そうか。今まで個性的な魔術師ばかりだったからな。こういう普通の人を見ると安心するんだな。だが。魔術師に普通の人はいない。それを、僕は次の瞬間悟る。彼は先程までと変わらない笑顔で、こう言っただけだ。

「でもすみません。兄は留守なんです」

『へ？』

啞然とする僕達をよそに、第二撃。

「今国外に出張中で、あと2、3年は戻ってきません」

『え、ー！』

「まあ、僕が預かっているんで、戻せるっちゃ戻せるんですけど」
ここ一番のスマイル。リウ……。無自覚なのかな？ 小悪魔、だよ
ね。

一応ほっとしてから、ああ、と何故か納得したムハンさん。

「そか。お前、4級に上がったんだっけ？」

？ 4級？ 何だろう。そういえば、スー様の所に行った時も、1級がどうか言ってたような……。そんな僕の疑問をよそに、会話を続けるリウ。

「はい。だからきちんと手順を踏めば、出来ると思いますよ。まあ、やった事ないんで、少々手間取るかと思いますが……。そうだ！
アハトさん、少し手伝って下さい。それを課題にしますから」

キラースマイル。って、いやいやいや。今の話の中に疑問点が3つぐらいあったよ!？」

早速ぶつけてみる。

「えーと、その前に。質問良いですか？」

一瞬、きよとん。でもすぐに笑顔で

「はい、何なりと」

応じるリウ。お前は執事か。

「あの、“記憶”って、そういう風に受け渡しみたいな事出来るんですか？ あと、魔術師って、“級”とかあるんですか？」

再び、きよとんとするリウ。しかしそこは持ち前の推理力。

「……ムハンさん、きちんと説明して差し上げなかったんですか？」
原因の主に怪訝そうな顔で尋ねた。すると、今度はムハンさんが、決まりの悪そうな顔をして言った。

「……リンに止められたんだよ」

？ “リンに止められた”って？ 僕には解らなかったけど、リウには分かったよううで

「成程」

ようやく納得したようだった。そして、僕の方を向いて、こう言った。

「アハトさん、申し訳ない事をしましたね。話においてけぼりだったでしょう。では、必要な所だけかいつまんで説明させていただきます。まず、魔術師の階級についてですが、魔術師はランクに依じて、1〜7級に分かれます。ランク分けは5年に1回の試験と、普段の業務成果によって決められます。業務とは、人々の願いを叶える事です。まあそれにも、ランクに応じて差があったりするんですが、そこは置いときましょう。で、対価として受け取った記憶ですが、少し力のある血縁の者になら、預ける事は可能なんです。それを勝手に返すとなると、ある程度力が無いとダメなんです。それが出来るのが3級からなんです。まあ勿論、返し方をおしえてもらわなければいけないんですけどね。でも兄は途中までしか教えて

くれなくて……って、ああ、ごめんなさい。長くなってしまいましたね。一名寝てますし。こんなもんで良いですか？」

「あ、はい。ありがとうございます。何となく分かりました」

「ふにゃ？ 終わったかあ？」

……いや、確かに長かったけどね。

「はい。他に質問があれば、次のシエテさんをお願いします」

ふーん。次の魔術師さんは“シエテ”っていうのか。すると、その名前を聞いた途端、寝ぼけていたムハンさんの目がぴくっと開いて「そうか、ついに、か……」

と意味深な発言をした。

「？」

不思議がる僕をよそに、話は流れるように進む。

「さて。では早速始めましょうか」

＊

「えーと、用意する物は白墨、東西南北を表す物、記憶の入った小瓶、だそうです」

「東西南北を表す物って何でしょう？」

てゆーか、僕の記憶って、瓶詰なんですね！

「ああ、それは置き物です。東に卯う、西に酉とり、南に午うま、北に子ねずみの置き物を置く事で、位置取りをするんです。で、僕の印マークでもある子の方向にこの瓶を置きます。あとは、この図のように、白墨で線を書いて準備完了です」

「うーすっ」

渡されたメモに描かれていた図形は、なかなか複雑なものだった。円に円を重ね、三角形をちまちま描き、四角形や五角形、六角形を散りばめる。

「でつけたー」

「意外と簡単でしたね」

「ええ。特に兄のものは、全体を見ると複雑なんですけど、1つ1つは単純な図形ですので、意外と楽なんですよ。でも、大変なのはここからです。この魔法陣を発動させなければいけません」

「？ 呪文とかじゃないんですか？」

確か、スー様も魔法陣の使い手だったが、あの方は呪文で発動させていた。というか、今までの魔術師さんの例しか知らない僕には、むしろ呪文以外の発動方法が思いつけそうにない。

あ。でも確かに、呪文でもその言葉が分からなければ、術は発動しないのか。あー。結構厄介そうだな。

しかし、それは僕の杞憂にすぎなかった。それ、は。

「ええ……。兄は呪文を使わないんですよ……」

「あいつ、変わり者だったもんなー」

「そうなんです。普通、魔法陣っていうのは場を作ったり、力を安定させたり、まあいわゆるサポート役なのに……。兄さんったら、“呪文を唱えるなんて美しくない！ 僕の美学に反する！”とか何とか言って、あくまでも陣だけで魔法を使っていたからなあ。その方が時間もかかるし、面倒なのに。あー。でもその分利点として、後世に伝えやすい、ってのがありますけどね」

ふーん。そういうものなのか……。まあ、魔法に関して素人の僕が考えてみたところでたかが知れてるな、と思ったけれど、リウもムハンさんも出来あがった（正確には下準備の終わった）陣を眺めながら、うーんと唸っていたので、僕もそれに習う事にした。

一見すると、直線と曲線が複雑に絡み合った、万華鏡のような図形。でも、1つ1つのパーツは、単純な形……。？ あれ？ これ、どっかで……。嗚呼、そうか。

「……名前」

「え？」

「この手の魔法は、術者や返したりする物、あるいは返される側の人の名前を書き、矢印で結ぶと発動すると読んだ覚えがあります。あとは、聖水などで衝撃を与えたり、わざと陣の一部をくずしたり

する方法があるそうですね」

前に戻った記憶の断片。今まで僕の中に戻ってきた、ひとかけら。まさかその中に、魔法に関するものがあつたなんて……。どうしてだろう？　もしかしたら、魔法って、一般教養なのかなあ？

「お前……すげえなあ」

「……すごいですね。今はそんな事まで教えるんですか？」

「さあ……」

二人の言葉で我に返ると、何故か彼らはものすごく吃驚していた。え？　何で？

「試すような真似してごめんなさい。実は、兄から頼まれていたんです。 “ 最後だけは、本人に考えさせるように ” 、って。でも、あまり意味はなかったみたいです。さあ、お返ししましょう」

すつ、と懷から杖を取り出し、玉虫色の美しい光で、白と黒の世界に文字を書きこむ。カリカリカリ【l i u ↓ a c h t】トン、と軽く矢印をたたく。

その途端、ぱああと陣が光って、僕はその光に包まれた。もう慣れたこの感覚。

結局、沢山疑問は浮かんだけれど、ほとんど誤魔化されちゃったしな……。いつか、ちゃんと全部分かる日がくるのかなあ……。もしたら……。薄れていく意識の中で、そんな事を想った。

＊

ある部屋の一角。日のあたる場所に鳥籠が置いてある。

ただ閉じ込める為の檻のような素っ気無いものではなく、針金細工が施された、この中に住まうものを愛でる為の籠。

その主は、黄色い鸚哥^{インコ}だった。美しい羽の、とても可愛らしい鸚哥だった。

だが、何故かその姿は、髪長い美しい女の人の姿に重なった。

“ 疑問に感じる事は、貴方にとってはとても重要な事です。聡明な貴方なら、今まで起こった事、感じた事を照らし合わせれば、きちんとゴールまで辿り着けますよ”

L O V E c o m e b a c k . T o t a l . . 5

陸..c a n i n e

僕が感じてきた疑問。その答えが今日、解き明かされる。……はず。

「ほら、アハト。何ぼーっとしてんだ。行くぞ」

「は、はい！」

「二人とも、気をつけて」

「おう」

「行ってきます」

バタンっ。

見送ってくれたリンの顔が、心なしか寂しげに、そして悲しげに見えた。

扉が完全に閉まった事を確認してから、少女は物憂げに呟いた。

「いよいよ、か……」

バサバサ ＊ バサバサバサッ

「ふう、着いたぞー。ここが兄貴の家だ」

ムハンさんの兄、シエテさんの家はサンク・リウ兄弟の家に似て、こじんまりとしていた。多分、今までの魔術師さん達の家の中で、一番質素なものだろう。そりゃあ、トロワさんと合わないはずだ……。余裕があったら、何故結婚したのか聞いてみよう。

「ほれ、入るぞ」

「はいっ」

ガチャ。

「やつほー兄貴ー生きてるかー？」

「おお、ムハンか。久しぶりだな」

シエテさんはムハンさんとは違って、とても優しそうな好青年だった。眼差しも、春のお日様のようにやわらかく、初対面の人に恐

怖心を抱かせてしまうムハンさんとは大違いだ。でも、根っこは変わらないらしい。笑った顔と、内面の人の良さそうな所は同じだ。やっぱり、兄弟なんだなあ……。

「さて、アハト。僕に聞きたい事は沢山あるだろう。だからまず、それを解決しよう。その後で、君の最後の記憶を返すかどうか、君が決めなさい」

「最後……？ 記憶は“wish（願い）”を除けば、あと2つじゃ……？」

あれ？ どーいう事？

すると、思わぬ方向から声がした。

「ま、俺達兄弟が最後の砦って事さ」

「え？ ムハンさんも？」

「実は、な。黙ってて悪かったな」

……灯台下暗し。その言葉の意味と使い方を、僕は身を持って学んだ。まあ、仕方ない。僕は僕の記憶が戻ってくれば、それで良い。

「では、まず魔術師の制度について、説明しようか」

うん、臨む所だ。

「そもそも、魔術師はどうして、記憶を対価に人の願いを叶えているのか、わかるかい？」

確かに。“人の願いを叶える”、“対価をもらう”。そこまでは理解できるのだが、どうして“記憶”が対価なのか分からない。

ついでに言うなら、どうして対価として“支払った”はずの記憶を取り戻せるのかも、謎ではあった。

そこで僕は、素直にこう答えた。

「いえ、さっぱりです」

「だよなー」

皆で苦笑い。その後に

「それはね、神様からの指令なんだよ」

と、シエテさん。

魔術師の次は“神様”、っすか。いよいよ訳が分からなくなってきたぞ……。困惑する僕に

「まあ、なんだ。神つつうのが解りづらかったら、俺達のリーダーとでも思ってくれば良い」

ムハンさんからのフォロー。ああ、成程。リーダー、ね。

「で、その神様が物好きな人でね。一応“人を幸せにする”っていう目的は一貫しているんだけど、やる事はめちゃくちゃなんだ。神が若い時なんかは、いろいろな国の王様と結託して、裏で国々を操っていた、なんてお噂を聞いたりしたけど。でも、その神様も今やもうご高齢でね。昔ほど派手に動き回れなくなってしまったんだ。そこで、人々の願いを叶える代わりに、記憶の欠片をもらう事を思いついたんだ」

「ま、一種の旅行気分を味わう為だと考えてくれ」

「へ、へー。そうなんですか」

そんな理由で……。じゃあ

「まさか、記憶を返してもらえるのって……」

「一回見た記憶は“用済み”つつう事だな。中には気に入って、何回も見るヤツもあるらしいけど」

「それでも、せいぜい10回ぐらいの話だろーね」

……やっぱり。はあ、何だかな。願いを叶えてもらったらいいから、こんな事言える立場じゃないんだらうけど、でも

「不純だ……」

ぼそり、と二人には聞こえないぐらいの声で呟いた。ああ、もう何なんだよおー！

もうすでに頭はパニック状態だったけど、更に驚くべき言葉が、ムハンさんの口から飛び出した。

「そして、魔術師はその見返りに“命”を頂く」

「え？」

何ですと？

「んー。簡単に言うと、寿命を延ばせるって事、かな？」

「ああー」

なんだ、そういう意味か。てっきり、神の命をむしばんじゃう感じなのかと思った。

「だから、魔術師は殺されでもしない限りは死ぬ事はないのさ」

「へえー」

「一級魔術師のスー様に会ったろ？ 彼女は御歳……まあ、軽く千は超えているはずだ。でも、そうは見えなかっただろ？」

「はい」

っていうか、スー様ってそんな年だったんだ……。まあ、流石に千歳まで普通の人は生きられないからそこは分からないけど、でも百歳のおばあちゃん、って感じでは全然なかったな、うん。

「それも命の使い方だ。時を止める、って感じなのか。だから、スー婆は今の年齢より年は取らん。見た目はな」

「ほえー。すごいですねー」

でも……魔術師って、一体何者？

“神”が“リーダー”って事は、その遣い、“天使”みたいなものなのか？ うーむむ。何か、謎が謎を呼ぶなあ……。ああ、そうだ。1つ、気になっていた事があったんだった。

「あの、この流れで1つ質問です」

「はいどーぞ」

「この前、リウが“子”^{ねずみ}が自分の印だ、って言ってたんですけど、それってどういう意味ですか？ もしかして、ムハンさんが鷹になれたりするのと、何か関係があるんですか？」

「おお、鋭いねえ」

「あれは、んー。何だろう。まあ、神に認められた証ってどこか？」

「ま、そんなとこだね。魔術師にもいろいろな人がいてね。神が直接支配する組織である僕達“Tier”や、独立して独自に営業している“p i a n t a”、とかね。で、僕達の所は動物がシンボルでね。組織に入る前に、神から1人ずつに1匹、その人に見合った

動物の名が二つ名として与えられ、その動物に変身も出来るようになっちゃうって訳」

「へえー」

「俺は便利だからちよくちよく変身してるけど、他の奴はあんまりしてないみたいだな」

「ふーん」

何だか可愛い組織だな。

「さて、そろそろランクとの繋がりを説明しようか」

無駄話はここまで、といった具合に、ガラリと口調を変えて、シエテは言った。いよいよ、本題らしい。

「魔術師のランクってのは7級からだね。7級がlevel1。以下、級が上に行くに従って、level7まで扱える内容が変わっていく。それに応じて、もらう記憶も1つずつ増えていく……」

「ちょ、ちよつと待って下さい。じゃあ僕は」

「……そもそも、level8なんて存在しないんだよ」

「え？」

それじゃあ、僕って……

「level8はね、この世で唯一、特級の称号を与えられた“神の使い”と呼ばれる魔術師が創り上げた、彼女にしか使えない、究極の魔法の事なんだよ。でも、あまりにも強力だから、使われる事なく封印されていたんだ」

「それを最初に使われたのがお前だ。これだけ言えば、お前にも分かるよな？」

「……僕の叶えてもらった願いが、それほど重い、と」

「ああ。そういう事だ」

「僕達の預かっている記憶を返せば、君が何を願ったのか、はたまた君が何者なのか、君なら全て解るだろう」

「だが、それがお前の為になるかどうか……」

……。確かに、今までの話から推測するに、僕が記憶を取り戻しても、良い事はほとんどない、というか、また僕が思い悩むだけな

のだろう。ぶっちゃけ、僕は今の穏やかな生活と、“アハト”という名前を、今では気に入っている。だが……

「それでも、僕は知りたいです」

だって、その為に7人の魔術師を巡ったのだから。

「……宜しい。その心意気に免じて、僕のは返そう」

そう言っ、シエテさんは宙に図形を描いていく。丸や星、文字が重なり、1つの陣を成していく。ポンっ。

「君の、“名”は？」

すうっ。嗚呼、懐かしい。涙が一筋頬を伝う。

「僕の名は、ロメヌ。この国の王子だ」

おかしい、とは思っていた。

“何故この街は、少しずつ戻ってくる僕の記憶と、これほどまでに一致するのか”

人々の笑顔も、明るくにぎやかな街並みも。ただ、今まで気付かなかったのは、この街と僕の国に決定的な違いが2つあったからなのだ。それは――

「この街には城がない。そして、武器も兵器もない。この街、失しモノ街ロストタウンと言いましたっけ？　ここは僕の国を模写したもの、なんですわね？」

「流石、王子様。正解です」

「ま、正確には、土地は移してきたし、ここの人達は本物のお前の国の人だよ。魔術師以外は、な。あいつと、それからあいつに協力した俺達の魔力にも限界はあったから、城下街の人達しか連れて来られなかったけど」

「それが心残りだ、とも彼女は言っていたね」

「やっぱり……僕の願いは、自分の国の人々を守る為のものだったんですわね」

「そう。 “お前は戦争や犯罪から人々を守りたい”、そう言ったんだ」

そう、だったんだ……。その、心優しく使命感の強そうな特級魔術師さんには、感謝しなきゃ……。でも何だろう。まだ何かひっかかる。僕は何かを見落として……。!?

「ま、待って下さい」

『?』

「……僕は、そもそもこの年でそんな事を願ったんですか? いや、きっと違う。もっと大人に、それこそ、戦争に兵士として投入させられてから、そんな願い事をするべきなんです。だって、いくら一国の王子だからと言って、今の年齢でそれを望むのはおかしい。だって、僕はまだ子どもだ」

最初に鏡を見た時に感じた違和感は、これだったのか……。今までの事も、全て僕が大人だったと考えれば理屈が通る。そして……「そこまで解ったのか。そうか……」

「ムハンさん、もしかしたら貴方は、僕を大人に戻す為の何か、を持っているではありませんか?」

「うーん。正確には、お前をお前に戻すもの、かな?」

「やっぱり、鍵を握るのはムハンさんか……」

「返しては、いただけませんか?」

「……仰せのままに」

お前の力を返しましょう それは守る為にも壊す為にも使える力
どうするかはお前次第 願わくば この力が使われる事のない
事を――

今までに聞いた事のないぐらい優しい声で、ムハンさんがそう唱えると、僕の胸の辺りでピカ、と何かが光った。そして

「!?!」

*

ガシャンッ。何かが壊れた音がした。

音のした方へ向かうと、彼の首飾りを入れていた箱が、跡片もな

く消えていた。そうか、ついに……。

「彼は全てを取り戻したのね」

Tierの皆に協力してもらって、記憶をわざとバラバラにしたり、思い留まるように示唆したり、妨害したり、思いつく限り全ての手は打ってみたんだけど……。

でも、それも終わり。時間稼ぎは、もうおしまい。

「私も、覚悟を決めるべきね」

そう、あの時みたいにな。

NAME・PERSON・WISH come back. Tot
al..8

漆..parakeet

すうう。首飾りから流れ込んできたのは、懐かしくも、強大で、恐ろしい力。

「どうだ？ 力が戻った感覚は」

「僕も、魔術師だったんですね……」

確かに、思い当たる節は沢山ある。でも、だったらどうして、僕は自分で、自分自身の力で、願いを叶えなかったのだろうか？ 記憶は全部戻ったはずなのに……。それも願いのうちなのか？

……判らない。でも、まだ、何かある。

「魔術師になるためには、10年間の教育と8年間の研修をこなし、さらに“神”に認められなければならない。しかし、逆に言えば、それさえ乗り越えられれば、誰でも魔術師になれる。神の血筋を引く天人そらびとでも、地に堕ちた邪人じゃびとでも、あの世の住人の死人でも、そして、普通の人間でも」

「でも、神に認められるのが大変なのさ。少しでも悪意のある奴ははじかれるからな」

「え？ でも、リンは“悪い奴もいる”って」

それに、僕の中に帰って来たこの力……決して、善いモノだとは思えないんだけど。

「それはね、彼女が君に、記憶を取り戻してほしくなかったからさ」
え？

「“神の使い”はリンなんだ」

ええー！？ じゃあ、

「……じゃあ、あの鸚哥が……」

「そう。あれが、神様が、自分が真に認めた者の証として、初めて与えた印。そして、リンが地上に実習に行った時、目立たないようにとっていた姿なんだよ」

「俺達には、お前の失くした8年間を戻してやる事は出来ない。だ

から」

「僕達の知りうる限り全てを、君に話そう」

＊

私は30年前、天界から地上に派遣された。

私はその頃、すでに神に仕え、魔術師達を統括する身だった。だが、地上に降りた事は一度もなかった。私は神の孫娘として生を受け、その将来を期待されていた為、外部の悪い影響を受けないよう、宮殿に閉じ込められていたからである。今思えば、そういう所は私とロメヌは似ていて、それがより一層、彼の事を特別な存在だと思わせたのかもしれない。ともかく、籠の鳥状態の私の身を案じたのだろう。お母様が当時から魔術師の長だったスー婆様に頼みこんで、神の反対を押し切って、私を“研修”という名目で外に出して下さったのである。

研修先は長きに亘って協力関係にある、ロメヌの国だった。私は神から鸚哥の姿を与えられ、鳥籠の中から窓の外の街並みや宮殿の様子を観察するように、と仰せつかった。それは、“研修”というより“視察”に近かった。それでも、文字通りの籠の鳥になっても、地上での生活はとても楽しかった。

だって、ロメヌがいたから。他ならぬロメヌのそばにいられたから。

私はロメヌの14歳の誕生日プレゼントとして、彼の手に渡った。彼は私に“リン”という名前をつけてくれた。そして、いつも微笑みながら、私の頭を撫でてくれた。時には、私を肩に乗せて外へ連れ出してくれた。

……嬉しかった。私は神の長兄の一人娘。つまり、いずれは神になる身。だから、私には名前が与えられていなかった。必要が無いからである。お父様やお母様も、娘フィユとしか呼んで下さらなかった。せめて兄弟がいればなあ。識別の為に名をつけてもらえたのに。そ

んな事を何度願った事か。だから、嬉しかった。

その日から、ロメヌと私はずっと一緒だった。

彼が心身ともに成長していく姿を見守るのが私の日常であり、彼の独り言ともとれるような話を聞くのが私の日課であり、彼の肩に乗って出掛けるのが、何よりも楽しみだった。

でも、そんな日々は彼が20になるまでだった。

私は知らなかったのだ。彼が戦争に行く為に、兵器として使われる為だけに、魔術師にさせられた事を。

本来なら、そんな事は出来ない。それだけ、神の目は厳しい。だが、この国は違う。言うなれば、お上直結の城下街のようなもの。ここの王族だけは、然るべき手段をとれば魔術師になれる。例えば、その力の為に、おびただしい量の血が、流れる事になっても。実際、彼の父である現国王は、その力で自国の周辺のほぼ全域をその支配下に置き、小国だった彼の国をたった一代で大帝国にまで乗し上げていた。

そして、ロメヌもまた、わずか2歳の頃から“教育”を受け、20歳になった時、実技試験も終え、晴れて魔術師の仲間入りを果たしたのだった。

それから、ロメヌは“兵士”ではなく、“兵器”として戦場に駆り出された。

“記憶を対価に願いを叶える事”

魔術師の本分はそこにある。だが、それは強大過ぎる“力”を使う為の、大義名分にすぎない。つまりは、“人の願いを叶える”事は“対価があれば何でも出来る”という事だ。

物を“探す”、“壊す”、“創る”。その方法を学び、使う事の出来るのが魔術師。勿論、出来ない事だって沢山ある。しかし、その力は何にだってなれる可能性を秘めている。

医者にだって探偵にだって料理人にだって大工にだって、そして、兵器にだって。

ロメヌはとても優秀だった。とても優秀な、兵器だった。

彼の手は段々、血と脂にまみれ、心は徐々に罪悪感と悲壮感に蝕まれていった。

そんな事を2年間続けて、久しぶりに帰って来た彼は、私に、いや、空に向かってこう言った。

――何故人は戦うのだろう

――何故僕は沢山の罪なき人を殺さなければならぬのだろう

これは、彼にとって禁句だった。何故なら、彼の国が豊かなのは、多くの人々の犠牲によるものだ、という事を彼は知っていたからである。彼はこの国の人々が大好きだった。色とりどりの花が咲き乱れる花園のような、温かい笑顔が大好きだった。彼自身、その人達を守る為に戦っていたのだから。

でも、彼は堪えられなくなってしまったのだ。

仲間の為に、他人を殺す事に。

そして、私に虚ろな目で、こう告げた。

「なあ、リン。この争いを止める方法は、本当にないのだろうか……」

私には彼の気持ちが痛いほど分かった。だから、彼の願いを叶えてあげたい、全てが終わってしまった今でも、そう思う。でも、それは無理だという事も、私は知っていた。私はその8年間で、人の温かさや優しさを知った。同時に、醜さや哀しさも知ってしまった。そこで私は、ロメヌだけを戦争から解放してあげる事を思いついた。つまり、彼を天界に連れてこよう、と考えたのである。

「おじい様。私の一生のお願いです。どうか、ロメヌを助けて」

「フィユ、解っているだろう。それでは根本的な解決にはならぬ。

王子が悲しむだけじゃ」

「……判って、います。だから……彼には眠ってもらいます」

「何？」

「彼が私に、実戦に、ひいては戦争に関わった8年間で巻き戻すの

です」

「お前、まさかあの術を……。しかし、それでは時間稼ぎにしか」

「その8年間に、私が争いを止める方法を見つけ出します」

「そんなものはない！ 儂はお前の100倍は生きておる。そんなものあったら、とっくに見つけておるわ！ じゃが、やはり無理だった。だからあの国に力を与えて」

「見つからなかった時は、彼に全てをゆだねます。 “level 8”、発動許可を」

「しかし、あれは……」

「ええ、解っています。人の“名”と“力”を奪う事は、その人の命を奪ったも同然。彼が目覚めた後、強く生きてくれるとは限りません。でも」

「でも、なんじゃ？」

「私は信じたのです。彼を。それに、出来る限りのサポートはしますし、彼に選択の余地も与えます」

「……分かった。しかし、お前にもそれ相応のリスクは背負ってもらう」

「何でしょう？」

「1つは、天界から二度とではならぬ、もう1つは、子どもの姿で残りの余生を過ごす事、じゃ」

「え？ しかし、それでは……」

「無論、王子が目覚めるまでにその方法が見つからなかったら、の話じゃ。……それまで、頑張りなさい、“リン”」

「……ありがとうございます。おじい様」

「俺はどうしたら……」

コツコツ

「ロメ、ここ、あけて」

「何だい？ リンが自分から出たがるなんて、珍しいね」

カシャン

扉が開いた。もう、後戻りは出来ない。ふー、と深く息を吐いて、変身を解いた。すーっ、とまばゆいばかりの光が、部屋全体を包み込む。次の瞬間

「え……？」

私は、元の姿に戻った。

「君は……」

ロメヌは驚いたようだった。無理もない。突然、鸚哥が女性の姿になったのだ。いくら魔術師だからとはいえ、目を丸くして、呆然としたまま動かなくなるのも、致し方ない事だろう。

だが、そこでひるんでいる暇はない。私は意を決して、言った。

「私は“神の使い”。貴方の願いを、叶えて差し上げましょう」

「君は……リン、なのか」

流石、というべきなのか。状況の飲み込みは早かった。

「しかも、“神の使い” って、あの……」

「うん、そう。今まで隠してて、ごめんね」

「……争いは、失くせると思うか？」

やはり、そうきたか……

「ええ、きつと、探し出して見せる。だから、待っていて。私達が出逢った、14歳の姿のままで」

＊

「これで、俺達が知っている事は全部だ」

「……リンはね、ずっと苦しんでいたんだよ。君を、ここに連れてくる事について」

「でも、お前の苦しんでいる姿が、あいつにとっては一番辛い事だったんだ。……それだけは、分かってやってくれ」

「……まだ、疑問は全て解決していません。彼女と、リンと話す必要があります」

「私なら、ここにいますわ」

リンは黄色い鸚哥の姿。僕は14歳の子どもの姿。
二人とも、最初に出逢った時のままだった。
でも、もうあの頃には戻れない。そんな気がした――

全てのピースは出揃った。

そして彼らは、新たな時を刻み始める。

捌：human

「リン「ごめんなさい、ロメ。私、結局……」

「良いんだ。その気持ちだけで、嬉しいよ。でも、まだ解らない事が沢山あるんだ。それを聞いても良いかい？」

「はい」

「まず、何故僕を子どもの姿に？」

「……ロメに時間を無駄にして欲しくなかったの。私の魔法は時の流れを“戻す”、いいえ、流れを“逆向き”にする事しか出来ないから。止める事は、出来ないから」

「そう」

「それに……私の事を、思い出してほしくなかったの」

「何故？」

「だってロメ、願いが叶っても叶わなくても、天界コトから帰っちゃうでしょう？ でも、私は天界から出られない。もう、ロメと一緒にられない！ だったら、いっそ……」

そこで、とうとう耐えきれなくなったのだろう。リンの美しい瞳が、涙であふれた。それでも、彼女は俯いて、必死で何かに耐えようとしていた。

全く……リンは変わらないな。一生懸命で、思い込みが激しくて、でも、憎めない。今だって、僕の為を想ってやってくれた事なんだろうけど、さ。うん、おぼろげだけど、徐々に記憶が戻って来た。やっぱり、リンはリンだ。僕が図鑑に載っていた珍しい花を見て、“これ、見てみたい……”とぼそと呟いただけで、丸一週間探しに行っちゃった、鸚哥の時と同じだ。あの時も、ものすごい心配してあちこち探し回ったのに、花をくわえて笑顔で帰って来たリンを見て、思わず笑っちゃったもんな……。

そのリンなら、大丈夫。僕達の、8年間の“溝”は埋められる。でも……1つだけ気になった事があったので、それだけとりあえ

ず聞いてみる。

「どうして、地上には行けないの？」

「それは「儂との約束だからじゃよ」

「！ アインス様、それに、スー様、トロワさんまで」

いつの間に。……そういえば、ここシエテさんの家だったはずなのに、何か宮殿みたいな所になってる。

「これも、魔術ですか？」

「そうじゃ。王子よ、済まなかったな。儂達家族のゴタゴタに巻き込んでしまつて……」

「家族？」

え、まさかとは思つてたけど、もしかして……

「ああ。儂、まあ神なんじゃが（え！？）の妻がスー（うん）、そしてその子シエテ（え？）とトロワの娘こそ、フィユ、つまり、リンじゃ」

「え————！？」

そんなんアリですか……。てか、アインス様が神だったんだ……。スー様だと思つてた。で、神の子どもトロワさんじゃなくてシエテさんだったんだ。逆でしょ、普通。じゃあ何であんなに雰囲気似てるんだろ……。つかシリ阿斯な展開ぶち壊しだな……。

「じゃ、じゃあ、リンとムハンさんって」

「叔父と姪の関係だ」

……。

「ちなみに、アル・リアン姉妹とリウ・サンク兄弟は有志の協力者だ。何せ人手が足りなかったものでね」

「はあ」

うん、もう何があっても驚かない、いや、驚けない気がする。

「こほんっ。さて、王子よ。お前は どうする？」

「どうする、と言われましても……」

「そもそも、僕達が娘の我がままを聞いてしまったのが、間違いではあったのだが」

「しかも魔力の提供までしちゃったし」

「儂なんて国の移動までしちゃった」

『はははははははははは』

「おい、まだ言うのか？ それに、今はその事を話す時ではない」

「そうじゃ。もう少しこの二人の身になって物を考えてやれ」

「しかし……」

ガヤガヤガヤガヤガヤガヤガヤガヤガヤガヤガヤガヤガヤ

本格的に家族会議が始まってしまった……。僕は完全に蚊帳の外。今までの事も、舞台裏はこんな感じだったんだろうなあ……。思わず笑みがこぼれる。

「あつ。ほら、アハトが呆れて笑ってるぞー。って、違う。ロメヌか」

「アハトで良いですよ。少なくとも、僕はここではアハトですから」

「そか。……そう、だな」

はあ。やっと会話が少し途切れた。ここぞとばかりに切り出す。

「それより」

「？ 何だ？」

「少し、リンと二人で話をさせてくれませんか？」

「良いじゃろう。スー」

「はい。“ t r a p ”」

ヒュッ

「これで、あの子達の未来が決まるのか……」

＊

ヒュンッ

「ここは……」

「ロメの部屋、だよ。……お城は、失しモノ街でも地上でもない所。
つまり、天界最上部の神殿の中に移したの。国王を説得して。……」

皆に、ロメだけの時間を戻す事は無理だから、って。歪んじやう、って言われて、それで……」

僕は途中から、リンの話を聞いていなかった。というのも、記憶が曖昧で、ここが本当に僕の部屋なのか、確信が持てなかったからだ。だが、部屋の物を1つ1つ手に取ってみると、まるでその物1つ1つに僕の記憶が宿っているみたいに、1つ1つ記憶が戻って来た。誕生日に買ってもらったという机。その上の沢山の教科書。唯一気が休まったベッド……。必要最低限の物しかない簡素な部屋に、1輪の花のように彩を添える鳥籠。

嗚呼、そうだ。間違いない。ここは、僕の部屋だ。

「懐かしい？」

「うん」

リンは戸惑っているようだったが、やがて、言った。

「……結局、争いを止める方法は見つからなかったの」

「そう、か」

先程のリンの様子から、予想はしていた。だけど……正直、こたえるな……。リンは悲しそうに、そして申し訳なさそうに、続ける。「人はね、誰でも欲を持っているの。そして、己の欲望を叶える為には、手段を選ばないの。だから……」

「でも、君は知っているだろう？ 人間はそんなに薄っぺらいモノじゃないって」

「ええ、知っているわ。でもだからこそ」

「リン、僕の話聞いてはくれないか？」

「？」

相変わらず、リンは真面目だ。だから、気が付かなかったんだろうな……

「僕はね、兵士として、そして兵器として、戦争に投入された4年間、その地域の人々や兵士達に話を聞いて回っていたんだ」

「そうだったの？ でも、何の為に？」

“人々は争いを望んでいるのか否か”

「それを、知る為に」

そう、これが僕の全てだった。だから、出来るだけゆっくり言ったつもりだったのに。かえって、それが彼女を刺激してしまったらしい。リンは激しい口調で言った。

「そんなの、望んで無いに決まっているじゃない！」

まるで、僕が何も解っていない、世間知らずのおぼっちゃまだと言わんばかりに、リンは言葉を投げつける。

「だって、戦争を望んでいるのは」

そこまで言った所で、はっとした顔をして、リンは黙ってしまった。やっぱり……

「気が付いて、いたんだね。全ては、僕の父の所為だって」

「ロメ、それを知ってて……？」

「うん」

ああ、そうさ。そんな事はとっくに、とうの昔に知っていたよ。

「ロメのお父様は」

複雑な表情をしながら、さっきより丁寧に、リンは言葉を紡ぐ。

「おじい様が認めた、唯一、その力を戦争にしよう出来る方。でも

それは、国を豊かにして、平和を保つ為、そう思ってた。でも……」

「言いづらいなら、良いよ。分かっているから」

僕の父は、その強大な力に逆に支配され、破壊する事にしか目がいかなくなってしまった。そういう事だろう。

「だから、今まで言えなかったの。だって」

「僕の父を、国を、否定する事になるからね。でもね、リン。僕は悪い事は悪い、って言っていきたいんだ。そして、直していきたいと思っている」

「でも、それはとても難しいわ」

自分の事は棚に上げて、よく言うな！。僕は思わず苦笑する。

「そうだね。一国の主が政策を180度転換させる事は難しい。それ位は、僕でも解っているつもりだ。でもね、僕だって何も考えが無い訳じゃないんだよ。僕はある小さな村で、武力以外の解決方法

を学んできたんだ」

「それは、何？」

「“言葉”だよ」

「え？」

「僕とリンがこうして向き合って話をしているように、その村では村人全員の話し合いによって、全ての物事を決定していたんだ。別に、特別リーダーみたいな人がいる訳ではなかったし、時には何日もかかる話し合いもあった。それでも、最後には皆納得して、強力し合っていたんだ。素晴らしいとは思わないかい？」

「……でも、それは小さな村だから出来る事よ。人が少ないから、意見がまとまるの。ロメの国のような多くの人がいる大国では、そんな事出来やしないわ」

リンの意見は理路整然としていて、至極真当だった。だが、ここでくじける訳にはいかない。僕も最後まで、自分の意見を貫き通す。「出来ない出来ない」と思っていたら、本当に出来なくなっちゃうよ？　そして、一度に全員の意見を聞く必要はない。例えば、村単位で意見をまとめて、その代表者達で話し合いを行えば、全員の意見は尊重されるし、人数的にも、上手くまとまらと思うんだ。――確かに、一気に全部を変える事は、難しいと思う。でも、少しずつなら、変えていけると思うんだ。それに」

「それに？」

「僕はこの国の王子だしね」

「そう……」

リンは考え込んでいるようだった。僕は更に畳み掛ける。

「リン、僕達は何者だ？」

「え？」

目を丸くするリン。そりゃそーだ。一見すると、脈絡もないし。でも。僕は続ける。

「僕達は魔術師だろ？　魔術師は人々の“願い”を叶える者だ。君はさっき、人間は欲深いものだ、そう言ったね。確かに、そうかも

しれない。でもそれは、僕達魔術師の方にも、原因があるんじゃないかな？」

「どうして？ 私達はただ、人々の幸せを願って」

「魔法は確かに素晴らしいものさ。何でも、あつという間に出来てしまう。でもそれは、本当に、その人達の為になるのだろうか？ 努力して何かを成すから、人は成長するのではないだろうか？」

「じゃあ、困っている人を見捨てるとでも言うの！？」

激昂してしまったリンを見て、再びの苦笑い。とりあえず、なだめる。

「そうじゃないよ。リンは極端なんだよ。困っている人がいたら、その全てを肩代わりしてしまうのではなくて、そっと手を差し伸べて導いてあげれば良いんじゃないかな？ 悩みや不安も、そっくりそのまま受け取って、解消してあげるんじゃないかって、話を聞いて共有する、それだけでも、心は大分軽くなるはずだ。魔術師じゃなくウィザードて、相談員と呼ばれるような、そんな存在になっていけたら、もっと自然に、人々の身近な存在に、僕達はなれるんじゃないのかな？」

青二才の戯言でも良い。夢物語である事は知っている。机上の空論だと解っている！ それでも、僕は願わずにはいられなかったんだ。“争いのない世界”を。

しばらくして、おそらく僕の言葉の真意を考えていたのだろう、リンは困ったように、はにかんで言った。

「……ロメの話は、いつも難しい。でもロメは、それが出来るって信じてるんだよね？」

「うん」

「だったら、大丈夫だよ。でも……」

「でも？」

「ロメ、自分で見つけてたんだね。また私一人で空回り。無駄になっちゃったね」

ははは、と自虐的に笑うリン。

「そんな事ないよ」

そんな姿が見たくなって、僕は言う。

「リンが探してくれた事で、僕の考えた事以外に方法が無い事が分かったし、それに、天界に来た事だって、無駄じゃなかった。いろんな魔術師に出逢って、力、それも“言葉の力”の素晴らしさが、更に身にしみて分かった。だから、この方法を信じ抜く事が出来たんだ。だから、そんな事言わないで。自分の努力を踏みにじるような事を言わないで。そんな……そんな悲しい顔、しないでよ」

「・・・」

微妙な沈黙。リンの頬を、ポロポロと涙が伝う。

「うん、わかった。もう、しない。でも、ロメと離れるのは、嫌だなあ。だって、だって私」

「僕も、リンと離れるのは寂しいよ。でも、いつか、争いが無くなって、世の中が平和になったら、会いに来るから」

「本当？」

「本当。だから待ってて。上から、見守ってて」

「うん。でも……ロメ、相変わらずだね。相変わらず、頑固で、まっすぐ」

「リンこそ」

「ふふ。私達、似た者同士、なんだよね」

ははは。ふふふ。やっと、二人で笑い合えた。

キィィ

まるで、この一部始終を見ていたかのような最高のタイミングで、扉が開いた。

「話し合いは、終わったかの？」

『はい』

「お前と国の人達を8年前の姿に戻した魔法は、我が娘のオリジナルでな。時間を巻き戻す事は出来ても、進める事は出来ないんだ」

「つまり、君はもう一度、14歳から人生をやり直す事になる」

「それは辛い事かもしれないが、お前なら大丈夫、だろ？　なあ、アハト」

「はいっ」

「では、地上に戻るがよい」

「……はい」

「ロメ……。行つて、らっしゅい」

僕の顔に、リンの顔が重なる。

「……行つてきます」

頬を赤らめながら、僕は自国へと戻った。部屋には宿主を失った鳥籠が、悲しげに揺れていた。

＊

あれから。天界でも地上でも、改革が行われた。全ては、ロメの願った通りになってきている。それは、とてもとても少しずつではあるが。着実に、変わってきている。

それがロメヌの元気な証拠だと信じて、私は、天界と地上の間に創られた“相談所”へ向かう。そこで、訪れた人々の話を聞くのが、今の私の業務だ。

話を聞くだけで何もしてあげない、なんて、初めは職務怠慢だと思つてた。でも、相談に来た人達が、帰る時には笑顔になっていくのを見て、ほんの小さな事が、誰かを救う事もあるんだな、と思えるようになった。

それからは、無闇に魔法を使う事は無くなった。

——これで、良かったんだと思う。

「あ、虹だ。綺麗……。ロメも、見てるかな？」

ロメ、今頃何してんのかなー。一生懸命、働いてんのかな。……会いたい、なあ。

「あの一、すみません」

あ、いっけない。今は仕事だった……。思わずこぼれかけた涙を急いでふいて、笑顔を作る。

「はい、何でしょう？」

あれ？　この人……

「ある人にこの虹を届けたいんですけど、出来ますかね？」

「え？」

やっぱり、どこかで……

「ずっと待たせていた最愛の人に、見せてあげたいんです」

懐かしい声。フードを脱ぐと、そこには、私がずっと待っていた、温かい笑顔。気持ちが抑えきれなくなり、すぐさま駆け寄って、抱きつく。

「おかえりなさいっ、ロメ！」

「ただいま」

私の頭をなでる手のぬくもりが心地好くて、私は一層強く、彼を抱きしめた。

あれから、ちょうど8年。彼は二度目の22歳を迎えていた。

「これから、やっと新しい時を刻める。その始まりの日に、どうしても君に……。リンに会いたかったんだ。……一度目はお別れあのときだったけど、これからは、ずっと一緒だ」

終

欲と願いとは紙一重であり、人々は昔から、何かを“欲する”為に“願う”

それは、本能的なもの。だから、一概に悪いとは言えません。

“困った時の神頼み”というご都合主義な言葉もありますがまあ、それも自然な事です。

大事な事は、それが“善い”事なのか“悪い”事なのか、です。貴方が誰かの為に何かをしたいと願った時――神の使いは、貴方の前に現れる、かもしれない。

「にいちちゃん、にいちちゃんってばー」

「ああ、ごめんごめん。何だい？」

「だーかーらー、それ、何書いてんだよー」

「ああ、これか。……お前にはまだ早いよ。もっと大人になったら、見せてやるよ」

「えー。ケチー」

「ははははは」

「そーいえばよー」

「？ 何だ？」

「にいちちゃんを助けてくれたオウジサマ、ケツコンしたらしいぜー」
「え？ 誰と？」

「それがさー。なんかよくわかんないんだよねー。母ちゃんがゆーには、神サマのマゴらしいんだけどさー。そーいや、神サマが新しくなった、とかも言ってたなー。前の神サマがフーフでインキョしたー、とか。次の神サマもフーフでがんばるー、とか。つか神サマなんているわけもないのにさー」

「……そうか、あの方が……。本当に、大きくなれたものだ。
「おい、にいちちゃん。聞いてんのー？」」

「ああ、聞いているさ。でもな」
「？」

「神サマって奴は、本当にいるんだぜ？」

俺を助けてくれたように、な。

「……にちゃんのウソつき」

「嘘じゃねえって。ホントだよー」

はははははは

これは人々がまだ神の存在を信じ、共に歩んでいた時代の話――

終（後書き）

これにて、夏休み企画（？）Living thingは完結です。
大変長らくお付き合いました、誠にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1853n/>

Living thing

2011年10月6日22時48分発行